

文 = 志賀竜太郎
写真 = 清水啓二
制作 = 理論社

銀色の青春

ある少女と少年の物語

銀色の青春

ある少女と少年の物語

文=志賀竜太郎

写真=清水啓二

制作=理論社



文 志賀竜太郎（しが・りゅうたろう）

1930年和歌山市生まれ。家族が海外からの引揚げにより、旧制中学中退。

紡績労働者を経て、ニュース映画の企画者となる。現在、記録映画の脚本、演出に従事。

日本映画監督協会会員

住所：名古屋市北区平手町2-13

写真 清水啓二（しみず・けいじ）

1942年大阪に生まれる。高校まで富山に過す。

1963年東京写真短大卒業。報道写真家川島浩氏に師事。雑誌等の仕事に携わる傍ら、社会福祉、社会体育関係にテーマを設定していく。

1973年よりハンスキーの写真を撮る。

日本写真家協会会員

住所：東京都新宿区若葉3-1 吉田ビル201

NDC384 A5変型 20cm 182p

1978年初版 8395-32001-8924

文 志賀竜太郎（しが・りゅうたろう）

写真 清水啓二（しみず・けいじ）

銀色の青春 1978年10月第一刷発行©

制作 小宮山量平 発行 山村光司 発行所 株武会社 理論社

住所 東京都新宿区若松町104番地 電話 03(203)5791 振替口座 東京 9-95736

これは 身体障害者という負い目を
すすんで克服するために たとえば
スキーに取り組んで 白銀の世界に
みごとな青春のシユプールを描いた
ある少女と ある少年の 生き方と
彼らをささえた人びとの 記録です

銀色の青春Ⅱもくじ





はじめに

第一部

ある少女の物語

——ひとりで立てた！

a 〓 カナダにて

b 〓 竜王スキー場にて

c 〓 白鳥の湖

d 〓 スイミング・クラブ

e 〓 純愛小説のころ

f 〓 津軽海峡横断計画

g 〓 スキーとの出会い

h 〓 指導員Nさん

i 〓 立てた！

j 〓 ハンデ・スキー

k 〓 滑れた！

l 〓 輝かしいシュプール

94 85 72 62 56 50 42 40 31 26 16 8 7 5

第二部

ある少年の物語

——地面がうごいた！

a Ⅱ 二重苦の少年

b Ⅱ 美しいコトバ

c Ⅱ 高校生活

d Ⅱ 地面がうごいた！

e Ⅱ 一六位のドラマ

f Ⅱ ひとりのつばさ

ルポライターの心 志賀竜太郎
記録写真家の回想 清水 啓二

あとがき

181 173 161

155 145 127 120 112 104

103



本書は***

日本身体障害者スキー協会協力のもとに、

ルポライター志賀竜太郎が取材・記録した原稿と、

カメラマン清水啓三の長年にわたる記録写真とを、

理論社編集部においてリایت・構成を担当して制作しました。

(制作者・小宮山量平)

はじめに



少女の名は、杉田理江^{りえ}という。少年の名は、島崎和男^{わくお}という。——けれども私たちは、この本の中では、ひとりの無名の少女と、ひとりの無名の少年について語りたいと思う。

ふたりとも、身体障害者という十字架を背負って生きなければならぬ若ものである。これからの長い人生を歩みぬくためには、その身の負い目にたじろいではいられない。希望をもちつづけたい、不屈でありたい、必要とあれば、どんな訓練をも耐えぬき、どんな努力をも積みかさねたい。……そういう願いを、ふたりとも、スキーというスポーツにぶつけてみたという。

少女と少年が、やがてハンデ・スキーを身につけるまでの火のような努力ぶりには、胸打たれる。肉体の不自由さを克服しようとする不屈さが、人間のすばらしさを思い知らせてくれる。しかし、それがどんなにすばらしかろうと、若いふたりにとっては、そこに人生の到達点があるのではなく、ほんの一里塚を踏みこえているだけのことだろう。——どうか、私たちを、そ

んなにまぶしげに見つめないでください……と、ふたりとも、はにかんでしまう。若いふたりを、これ以上はにかませないためにも、私たちは、彼らの固有名詞を離れて、ひとりの少女とひとりの少年について語ることにした。

とりわけ、彼らの不屈な努力の背後には、両親をはじめ、数多くの関係者たちによる、有形無形のはげましがある。不屈な努力によって、少女が手にした栄光も、少年が握りしめた希望も、同時に、そのまま背後の人びとの栄光であり希望であるはずだ。それらピラミッドのように集大成された栄光と希望のぜんたいを見つめていただくためにも、この本では、ひとりの少女とひとりの少年の物語として語ることにした。

そして何よりも、ひとりの杉田さん、ひとりの島崎さんの、横に後ろに、たくさん杉田さん、島崎さんがいる。いてほしい。彼らにつづいてほしい。——いつしか私たちは、じつに多くの人びとを見つめ、たくさんめぐりあい感動することとなった。それらの人間群像のすべての代表選手としての、ひとりの少女とひとりの少年について語らずにはいられなくなった。

こうして、杉田理江さんと島崎和男くんを取材することから出発したはずのこの人間記録は、むしろ、同じ身体障害者としての苦しみを生きぬいているたくさん杉田さんたち、たくさん島崎くんたちを代表する、ある少女とある少年の生き方を記録することとなった。

では、まずひとりの少女の話から、はじめよう。

第一部

ある少女の物語

“ひとりで立てた！”



(少女と猪谷千春さん)

a || カナダにて

昭和五十一年四月――。

少女は、カナダへむかう飛行機の中にいた。

などと考えても、少女の頭の中にくりひろげられるカナダは、いちめんの白だ。

高校生である少女は、出発の前夜まで、なんと百科事典をひらき、なんと「カナダ」の項に眼を走らせたことだろう。今ではもう、そのほとんどを、そらんじてさえる。

――カナダは北アメリカ大陸北部に位置し、東は大西洋、西は太平洋にのぞみ、北西はアメリカ合衆国のアラスカ州、南は合衆国本土に隣接し、北は北極海に及ぶ面積で世界第二の大国。日本の約二七倍という広大な国土をもち、東西約六四〇〇キロ、南北約四八〇〇キロにわたるが、国土の大部分は北緯四九度以北にある。その北端はエルズミア島のロンビア岬で、北緯八三度に達する。ツンドラ・タイガ（寒帯大針葉樹林帯）などの寒冷気候地域が広く、地形も比較的単純である。……

記憶をたどる少女の眼は、丸窓に吸いよせられる。果てしもない雲海が、もう何時間つづいたことだろう。私は来た、――とうとう、来たんだわ……と、はるばるとした旅の思いを、嚙



カナディアン・ロッキーのふもとで

みしめる。その感慨を、またしても語りかけなくなって、指導員のNさんに眼を向ける。——
そうよ、とうとう、来たのよ……と、Nさんの瞳がうなずいている。少女がNさんに眼をむけるたびに、Nさんの微笑が返ってこなかったことは、一度もなかった。この姉さんのように若いNさんは、たとい一瞬といえども、少女への注視を怠ることはないのだろうか。少女はほほえみかえし、Nさんを安心させるかのように、おだやかに眼をつむってみせる。

——西部山岳地域は、ブリティッシュコロンビア州およびユーコン地方を占め、ロッキーマ脈が中心で、絶妙な山岳美で世界的に知られるバンフやジャスパーの国立公園およびカナダの最高峰ローガン山（六〇五〇メートル）がある。沈降海岸のため島や入り江の多い太平洋沿岸部は、偏西風と黒潮により温暖な気候にめぐまれ、降雨量も多い。銀・鉛・亜鉛などの鉱物資源のほか、電源開発には理想的な傾斜と水量の豊富な河川が多い。ロッキーマ脈と沿岸山地のあいだの全長二〇〇キロにわたる肥沃な氷成谷は美林におおわれ、リンゴ・モモ・ナシなどの果樹が栽培される。……

少女の頭の中で、「ロッキーマ脈」という文字は、めぐりあうたびに、きらめく。限りもない、いちめんの白の彼方に、その一瞬だけ、もう何度も写真で見たロッキーマ脈の主峰が、銀色に映えるのだ。



スキーバスでハンデ・スキーヤーたちが到着する。

その峰から、まっすぐにひらけた広大な白い裾野を、なんと軽がると、ひとりの少女が舞いおりてくることだろう。滑るというよりは、舞っている。ほんの少し、身をくねらせるだけで、ケシつぶのような少女の姿は、遠景の彼方から、近づいてくる、近づいてくる……。

「ああ、バンフのスキー場よ！」

少女は、自分の左足の不自由さを忘れきっている。はるかな遠景の中に化身している自分の姿に、うっとりとして見とれている。滑っても滑っても停止することはない少女の滑降の彼方に、ロツキーの山脈が輝きを増した。……

そして、少女は、ひとときをまどろんだのだろうか。

「ほら、カナダよ！」

指導員のNさんが、耳もとで教えてくれた。絹のようにうすらいだ雲の割れ目から、いちめんの白ではない大地が、うっすらと見えてきた。一たん見えはじめると、大地は、たちまち地形をととのえ、すがすがしい色彩をくりひろげる。

「ほんものの自然よ。日本列島の眺めとは、ずいぶん違うわね」

Nさんの控えめな言葉の底に、少女は、ふたりだけで通じあう思いを感じとった。Nさん自身が、かつて交通事故にあい、身体不自由の身となっている。空からの自然への讃美の陰には、祖国の山河をじゅうりんしている自動車文明や公害へのおのきがひそんでいる。

「ほんと、きれいなえ。……なんて、深ぶかとしているんでしょう」



「おめでとう！」カナダ大会の表彰式での祝福。

少女も控え目に、限りもなくつづく針葉樹林の大地だけをたたえた。

Nさんは、視界にカナダの大地がひらけるのにつれて、またしても新たな感動にとらわれるのだ。ほんの数か月前まで、その少女の顔も知らなかった。だが、少女は、いまこうして眼前にいろのだ。——ついに、ここまで来た……なん度つぶやいても、つぶやくたびに感動のこみあげる思いを、またしてもつぶやいてしまう。この年ごろの少女は、あつという間に変貌する。凛々しく、みずみずしく輝いている。Nさんは、自分で磨きあげた美しい珠玉を見つめるように、少女の横顔を見つめた。

カナダの《ハンデ・スキー協会》主催の国際大会に、日本身体障害者スキー協会も参加者を送ることになった。Nさんと少女も出場をみとめられ、いま、バンフのスキー場へと近づきつつある。

大地がせり上がるように近づいたと思うと、たちまち着地した体感が、少女をゆさぶる。そのときも、少女の頬は、見る見る輝いた。

さらに、バンフに到着し、白銀の世界にひろがるりっぱな施設に眼をみはったときも、少女の頬は、輝いた。

カナダのハンデ・スキーの一流メンバ―たちが、ずらりと並んで、日本からの参加者を拍手で迎えてくれる。そして、少女は、なんのためらいもなく、歓迎の人垣の中へ飛びこんでいくのだった。